

ティーチングポートフォリオ

健康科学大学看護学部

母性看護学領域 講師 飯嶋玲奈

2023年8月28日作成

1. 教育の責任

健康科学大学看護学部は看護師・保健師・養護教諭（二種）を養成している教育機関であり、カリキュラムは看護師・保健師養成を軸に構成されている。私は、母性看護学に関する授業および臨地実習を担当し、看護学部母性看護学領域長として、看護師養成に関する教育の責任を担っている。今年度担当科目は以下のとおりである。シラバスはWEB上に公開されている。

科目名	学年	必修/選択	時期	受講	単位	時間数
母性看護学概論	2	必修	前期	55名	1	15時間
母性看護援助論Ⅰ	2	必修	後期	55名	2	60時間
母性看護援助論Ⅱ	3	必修	前期	47名	1	30時間
母性看護学実習	3	必修	後期	47名	2	90時間
看護研究Ⅱ（母性）	4	必修	通年	5名	2	60時間
看護総合実習（母性）	4	必修	前期	8名	2	90時間
総合看護演習（母性）	4	必修	後期	59名	2	60時間

私が担当する授業は、上記の通り、母性看護学に関する講義・演習・実習が中心である。2年次前期に講義科目が開講し、2年次後期に1科目の演習を含めた講義科目が開講、3年次前期に演習の科目を経て臨地実習がある。4年次には看護総合実習および看護研究Ⅱがあり、母性領域に興味関心のある学生が母性を選択して実施するものであり、母性領域の学びの集大成ともいえる科目であるが、すべての領域の学びを終えた統合科目であるため、これまでの学びの成果を確認できる科目ともいえる。

専門領域である母性看護学の教育活動は、領域内の教員が、有機的な関係を保ち、互いの専門分野を生かした役割分担をし、教育効果が高まるよう努めている。

2. 教育の理念・目的

1) 母性看護学の意義

母性看護学において関わる対象者は、狭義ではマタニティサイクルにある女性、広義では、女性の一生である。とりわけ前者に焦点が当てられがちであるが、そもそも母性看護学は、妊産褥婦および新生児への看護活動に加え、次世代の健全育成を目指し、母性の一生を通じた健康の維持・増進、疾病予防を目的とした看護活動を目指す実践科学である。臨地実習においては、主としてマタニティサイクルにある妊婦・産婦・褥婦と胎児・新生児およびその家族としているが、女性の一生の健康を支える看護であることを学生に強調している。

本来、妊娠や出産は生理的現象であり疾患ではない。つまり、対象は原則、健康であることから、医学モデルの考え方は採らない。これは母性看護学の特徴の一つであるが、疾患をもつ対象理解を、他の分野で学んできた学生にとっては、非常に難しさを覚えるところであるが、ライフサイクルの中で女性を理解するために必要不可欠な思考であるため、繰り返し

教授している。しかしながら一方で、現代の特徴ともいえる、晩婚・晩産化や、生殖補助医療等により周産期のハイリスク看護の対象者は増えており、正常からの逸脱が多くある。そのため、疾病治療論のみならず、母性看護援助論Ⅰにおいても、正常からの逸脱、異常に対する知識と看護実践能力を養っている。周産期の異常について理解を深め、妊娠・出産・産褥・新生児各期に起こり得る異常とその原因、主な疾患について学び、どのような看護介入を要するか専門医師および助産師資格を持つ母性看護学の教員から、臨床の最先端の知識を教授している。

2) 母性看護学教育における戦略

前項1)において示した点に基づき、教育で大切にしている視点は以下のとおりである。

(1) ウェルネスの視点

看護診断のタイプには、問題型、リスク型、ウェルネス型の3つが存在する。学生は、これまでの援助の方向の多くは、対象の問題点に着目し、それを改善あるいは解決することに主眼を置いてきた。問題志向に基づいた看護過程の展開では、母性看護学のような、いわゆる生理的变化を辿っている対象、すなわち、問題や合併症がなく、異常へ移行する危険性の少ない対象であっても、無理に何らかの問題点を見つけ出さなければならないという事態が発生する。したがって、健康な人を対象とする母性看護学において、このような問題志向の看護過程を進めていくと、対象の適切な看護診断が出てこないという結果に陥ってしまいます。これが、母性看護学では、ウェルネス志向の看護過程を用いる所以である。一人の人間の全体像を捉えるとき、その人の中には問題のところもあれば良好のところもある。ウェルネスとは、単に健康増進だけでなく、社会的・心理的・個人的な側面も重視し、その人なりの健康状態を表す、さらにその人が目標に向かって成長・発達を目指していく絶え間ない行動、変革そのものを意味する。その人らしさを保ち、共感することで、その人の強みを引き出し、その人や家族の持つ力が最大限発揮されることを期待するもの、いわゆるエンパワメントである。対象者を全人的に捉えることで見えてくる、一つひとつの事象を丁寧に捉え、対象が持つ強みや良好なところに着目するというウェルネスの考え方とともに、対象者が自らの健康や生活を、“よりよく”するためにはどのようにケアしたらよいか、という視点、思考を大切に考えている。

(2) 女性を中心としたケア (Women-Centered-Care : WCC)

女性の一生の支援を目指している母性看護において、この視点は欠かせない。「尊重」「安全」「ホリスティック」「パートナーシップ」の4視点を掲げている。女性の体験や価値観、希望やニーズを尊重し、ケアを自ら選択できるように情報提供、意思決定を促しその決定を「尊重」する。プライバシーの保持、不必要な医療介入は行わない「安全」、個別性を重視したケアを意味する「ホリスティック」、そして父権主義ではなく、女性と医療者の「パートナーシップ」であること。このようなケアを通して、対象者が自らの健康を自分のことと

してとらえ、本来対象者が持っている力を引き出す看護を学生には修得してほしいと考えている。

(3) 家族を中心としたケア(Family-Centered Care : FCC)

母性看護では、女性に影響を与える胎児や新生児とその家族も看護の対象となる。ドラマティックな“生命の誕生”、一人の女性が妊娠、分娩、産褥を通して、“母親として成長していく過程”である。同時に夫も父親になる過程にある。妊娠・分娩・産褥が、生理的現象とはいえ、女性の生涯の中でも特に発達危機に陥りやすいこの時期、新しい家族形成の出発点であることから、女性や子どもだけでなく”家族”という視点が重要となる。生命の誕生を中心に、家族を含めた安全で快適なケア FCC(Family-Centered Care)を提供する支援を学生には大切に学んでほしいと考えている。

3. 教育の方法

学年が複数学年に跨って講義・演習・実習を通して学修していくが、それらを一貫した指導方針で統一し、連動させることで、学生の学びが深まっていくと考えている。

【講義】

教科書とパワーポイントを使用し講義を進めている。講義では、オムニバス形式を採り入れている。これは教員の専門性を活かすことで、学生に深く教授できることをねらいとしているが、欠点としては、学生が受け身となりやすいことや、内容の重複または不足が生じる可能性があることである。それらを補うために工夫していることを以下に挙げる。

まず前者の、受け身になりやすいことについては、学生へ一方的な授業にならないために、スライド資料を穴埋め問題にしたり、挙手制または指名により、答えてもらったりなど、受け身ではなく参加型の授業を心掛けている。中には、一人では発言しにくいという学生もいるので、小グループでの討議をするなどして、学生が主体的に授業に参加できるようにアクティブラーニングを意識して教授している。

後者については、教員間で差異が生じないために、共通シラバスの導入のほか、共通の教科書の活用、共通の評価基準の作成、そして、念入りに講義前の打ち合わせと、各講義前後の情報共有（フィードバックペーパーや講義内で気づいたこと）の実施を継続している。

また、次の授業に反省を活かす目的および学生の反応や理解度を確認するために有効と考え導入しているのがフィードバックペーパーである。講義の最後5分程度を設け、学生の理解度のみならず、授業に対する要望や意見を集約し、学生と共に授業を作り上げていく姿勢で臨んでいる。理解度の確認の中には、その日に講義した内容を解答する小テストを数問盛り込んでいる。教員が学生の理解度を確認できるばかりでなく、学生自身もまた、自身の習熟状況を客観的に評価できると考える。これらの小テストの結果は次回の講義で解説するように努めている。また、フィードバックペーパー記載の内容を次回の講義で一部紹介することや、自身の臨床の経験や、病棟や社会の最新情報を入手し、母性看護学に興味・関心を持ってもらうことで、その特徴を楽しく学んでほしいと考えている。

【演習・実習について】

学内演習では母性看護の対象となる妊婦・産婦・褥婦や新生児に対する知識や技術について演習する。学生は演習に取り組む前に、各種媒体を用いて自ら技術の目的や手順、注意点をまとめて実践に臨む。後期の臨地実習前の3年次前期に行うことで、2年次までの知識をもとに、技術の意義を考える機会となり、かつ、実習で実践する技術を自分でまとめ、演習することで、修得する効果が高いと考えている。母性看護において必要な技術のうち、取り組んでいる技術は、子宮底・腹囲の測定、レオポルド触診法、トラウベ桿状聴診器による胎児心音聴取、褥婦の腹部観察と授乳の援助、新生児のバイタルサイン測定、沐浴（泡沫浴）、更衣、体重測定、抱っこ、おむつ交換である。

実習は、複数の異なる病院の産科病棟での実践となり、それぞれ施設の規模や役割・機能が異なる。グループによって実習内容に差異が生じないように、実習の達成目標は一定にし、施設により差が生じる内容については、学内実習時間で補填している。

可能な限り、指導者や対象者から学ぶことを基本とし、教員は必要以上に実践「指導」をしない。実際の対象者との関わりの中で、学生が感じるとることがいちばんの学びと考えているのと同時に、教員よりもはるかに、看護師や助産師の母子への関わり方や態度から看護観や母性看護の役割について考えを深めることができると考えるからである。

4. 教育の成果・評価

本学では各授業が終了後、全授業において授業評価アンケートを実施しているが、私は本年度より本学に着任し、現段階では、授業評価の結果がまだ出ていない状況あるいは授業が開始されていない状況にあるため、結果をここで示すことはできない。しかしながら、すでに担当した講義において、独自に、学生にフィードバックペーパーの記載を求め、得られた回答を以下に記載する。

「講義内での問いかけや小テストが、知識の確認だけでなく、自分がどの程度理解できているかわかったので、復習が必要だと思った。」「アセスメントは難しいと思っていたけど、対象の立場になって考えることで、見えてくることもあって、楽しくなった。」など、アクティブラーニングやアウトプットの機会により、学生の教育の機会が広がっている。

「難しい」という内容については、のちの講義で再度触れる機会を設け、繰り返し教育していくことを心がけている。話すスピードや資料の見やすさ等、授業の展開については、教科書の見出しで区切るように心がけたり、講義を行う教室の明るさや座席配置によって、パワーポイントの配色や文字の大きさなどを工夫したりなど都度改善に努めている。

また、私が母性看護学を教授するうえで大切にしている内容（上記2-2）参照）については、「母子だけでなく父親のことを考えなくてはならない」、「母性ではほかの領域と比べて正常が多く、対象がよりよくなるためには、という点で考えていくといいとわかった」、「まだ問題志向になってしまっているけど、ウェルネスがわかってきた気がする」、「命の誕生もだけど、母子が地域に帰ってからも安全安心に暮らしていけるように、支援を考えたい」な

どの反応があった。学生にとっては難しいと思いがちであるが、人（女性）が歩むライフサイクルの中で、対象がよりよい生活、健康を維持していくための支援と捉え、理解できるようペーパーペイシエント教材を用いて、くりかえし教授していることに一定の効果があったと考えている。また学生は、ペーパーペイシエントのアセスメントを通して、徐々に、問題解決志向だけでなく、ウェルネス志向も含めた対象理解があることを学修し、ホリスティックに看護展開する重要性を理解し始めていると考える。

5. 今後の目標（短期・長期）

前提として、本学の建学の精神、教育理念の基に定められた教育目的に従い、各担当科目の学修目標の達成に努める。

【短期目標】

より積極的なアクティブラーニングを行い、学生の主体性が促進され学びが深まる教育を追求していく。

具体的な取り組みとしては、講義内で扱う教材については時間をかけて、十分に教材研究をしたうえでオリジナル教材を作成し、学生の準備性を整え、学生が予習を十分に授業に臨むために、早めに提示する。視聴覚を駆使して、他覚的な方法で学生が修得できるよう工夫する。

毎回、授業後のフィードバックを継続し、学生からの評価を振り返り、現状の把握に努め、改善していく。同時にタイムリーに学生の理解度や反応の確認をし、授業に反映させていく。教授する立場の私自身、母性の内容にとどまらず、教育学の自己研鑽を積んでいく。

【長期目標】

講義や演習を通して、看護実践の意味づけや振り返りから学生が看護観を深めていけるような発展的な授業を展開したいと考えている。Z世代と括られる現代の若者は、興味のあることにしかその意思を示さないとされている。つまり、興味のないことに対しては耳や目を背けたり、関心を寄せたりしないという能力も一方で長けているという。だからこそ、実践演習を通して、母性看護の特長やその深みを、肌で、心で感じてほしい。僅かでも、「母性看護っていいな」と思えることができたなら、能動的、主体的な学修が期待できるからである。そのために、限られた授業時間で、これらを実施するために、反転授業をいずれは採り入れていくことを目指す。